



TITLE:

2)「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔大学院GP〕採択：遺伝カウンセリングにおける「情報提供」に関する臨床心理学的研究

AUTHOR(S):

福田, 斎; 伊藤, 良子; 山本, 善晴; 松本, 拓磨

CITATION:

福田, 斎 ...[et al]. 2) 「研究開発コロキウム」報告（要約版）：〔大学院GP〕採択：遺伝カウンセリングにおける「情報提供」に関する臨床心理学的研究. 研究開発コロキウム：平成19年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) 2008: 36-37

ISSUE DATE:

2008-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/143080>

RIGHT:

遺伝カウンセリングにおける「情報提供」に関する臨床心理学的研究
Research of clinical psychology on “provision of information” in genetic counseling

研究代表者 福田 斎 (D2)

教員 伊藤 良子

研究分担者 山本 喜晴 (D3)

松本 拓磨 (M2)

〔研究目的〕

遺伝カウンセリングは、遺伝に関する問題に悩む人に提供される支援のシステムであり、その中核をなすのは遺伝医学的情報提供であるといえる。その中で、遺伝医学の専門家はクライアントに対し、当該疾患について、また、遺伝という現象そのものについての「教育」を行っている。そこで、本授業では、遺伝カウンセリングにおけるクライアントへの「情報提供」という「教育」のあり方について、それがクライアントの心にもどのように届き、どのような影響を及ぼすものであるか、心理臨床の観点から考え、理解を深めることを目的として探究を行った。

〔研究経過〕

グループのメンバーで、以下の3つの活動を行った。

① 京都大学医学部附属病院における遺伝カウンセリングやスタッフミーティング、ケースカンファレンス、遺伝カウンセリングに関するセミナーへの参加を通して、遺伝カウンセリングにおける「情報提供」の実情を調査する。

心理スタッフとしての遺伝カウンセリングへの参加、京都大学医学部附属病院遺伝子診療部のスタッフミーティング、関西遺伝カウンセリング合同カンファレンスに参加した。また、2008年1月12、13日に行われた「第31回遺伝カウンセリングリフレッシュセミナー 色素性乾皮症の遺伝カウンセリング」に参加した。さらに2008年2月10日に行われた「第14回 医療における心理臨床ワークショップ」に参加し、周辺領域である児童精神科における情報提供の実情についても知る機会を得た。

② 生命科学の専門家との交流・意見交換などを通して、「遺伝」を担い生きていく主体としての人間に軸を置きつつ「遺伝」についての見識・理解を深める。

2007年12月12日に藤田潤先生（京都大学大学院医学研究科教授）、2007年12月

21日に田沼靖一先生(東京理科大学薬学部教授), 2008年1月18日には武部啓先生(近畿大学総合理工学研究科客員教授)をお招きして, 講演会, シンポジウムを行った。

③ 遺伝カウンセリングにおける「情報提供」を受け取る人の「心」に焦点を当てた研究を行う。

20代, 30代の男女30名を対象に, 仮想場面を用いた質問紙調査を行った。

〔研究成果〕

遺伝カウンセリングにおける情報提供の実情に関して, それに従事する専門家によるカンファレンスやセミナーに参加し, 調査した。カンファレンスでは, クライエントに提供されるべき「情報」の内容についての検討が中心となり, 情報提供を行うカウンセラーとそれを受けるクライエントの「体験」は十分に検討されているとは言い難かった。一方, セミナーのロールプレイでは個々のクライエントに合わせた対応が強調されており, これら2つの間でうまくバランスを取ること, 情報提供後の心理的サポートを充実させることの必要性がうかがわれた。また, ワークショップへの参加により, 児童精神科における情報提供は, ある程度治療者－患者関係ができた上で行われることがわかった。一度あるいは少ない回数の関わりの中でクライエントに重要な情報を伝えなくてはならないという遺伝カウンセリングの構造そのものの抱える難しさが示唆された。

次に, 生命科学の専門家との交流や意見交換は, 遺伝カウンセリングでクライエントに提供される情報を「科学」という次元で捉えることと, 「自分」との関係性で捉えることとの間に横たわる大きな溝について考えさせられるものであった。「自分」との関係性にとらわれず探究した結果得られ, 我々の自然に関する理解を広げ深める科学的事実は, ひとたびそれが個人の遺伝医学的情報という形になり「自分」と関係づけられることになれば, 全く違った姿で体験されうるのである。このことは, 我々の身の回りに溢れ, スタイリッシュな響きを持つものとして受け止められている「遺伝子」や「DNA」などの言葉と, 依然として我々の間でタブー視されている「遺伝」という言葉が喚起するイメージのギャップにも見ることはできるのではないかと考えられる。

また, 自分が遺伝子疾患の当事者であるという仮想場面を用いた質問紙調査からは, こういった問題に対して我々が抱く運命的な感じや不気味さ, あるいは遺伝子変異を持った存在であるということによって自分の何かが決定的に変わってしまったり周りの人達と別質の人間になってしまったりするのではないかという思いが見出された。さらに, 先述したような「科学」と「自分」との, また, それぞれの立場を担うカウンセラーとクライエントとのギャップや, そこに避けようもなく生じる「怒り」の感情も見て取れた。

個人研究では, 現代における遺伝情報とイメージが, 「遺伝子」に焦点を当てた微視的な科学の発展により解離していく過程を歴史的に捉え, 考察した。

これらの研究成果は, 来年度以降, 関連学会にて発表予定である。